

【ネタバレあらすじ】

### 第一部

●遠未来（一）／遠い昔、銀河コミュニティの基盤を作った後でブラックホールに飛び込んだと伝えられる「大始祖」。ただし、あまりにも遠い昔のことなので、はっきりしない点も多い。「大始祖」についてよく知るために、「母」と「子」は銀河系の半分を横断する長い旅に出る。

●現在（彼方を望む）／小学生の鮎沢望（のぞむ）は名前の由来を父に尋ねる。教えられた「遠くを見る」という意味に釈然としないものを感じながら、望はやがてその由来の通りに、天文台や望遠鏡に興味を持つようになっていく。

●遠過去（三）／銀河の中心から遠く離れた場所で、歪んだ空間から一つの物体が滑り出た。その〈飛行体〉は最初の目的地に向けて動き出した。

### 第二部

●遠未来（二）／「母子」は「大始祖」の生まれた惑星にやってきた。伝説によると「大始祖」はここから「望遠鏡」を使ってほかの種族を見つけ、その後「時計を合わせ、梯子を接いだ」のだという。

●現在（真冬の遠日点）／高校生になった望は天文部に入部し、同学年の千塚新（あらた）と親しくなった。交流を通じてさらに宇宙への興味を深めた望は、電波望遠鏡を運用可能な大学に進学する。大学管理のアンテナを直接見るため所在地を何度も訪れていた望は、そこで同じ研究室の八代縁（ゆかり）と出会う。彼女もまた同様に、このアンテナは何度見ても飽きないと考えていたのだ。望は太陽系サイズの VLBI（超長基線電波干渉計）を構想し、高校卒業後も親しくしていた新と「彗星 VLBI サークル」を結成する。後に縁も加わり、三人は別々の会社に就職してからも熱く夢を語り合う。

●遠過去（四）／〈飛行体〉は意識の中で「行程表」を広げながら恒星間飛行を続けた。

### 第三部

●遠未来（三）／「大始祖」が残したとされる遺物があった。金属製の放物面とそれを支える基台の組み合わせがいくつも並んでいる。その中の一つの裏側に刻まれた、三つの文字のようなものを「子」は見つけた。翻訳エンジンで意味を確認すると、どうやら「まだ見ぬ繋がりを求める」と書かれているようだった。

●現在（自由の旅人）／協定世界時二〇九六年。人類は精神のアップロードを実現させていた。情報構造を取り出す時点で生体脳は死に、記憶の連続性を保った自分が別媒体で生まれるのだ（複製は不可能）。アップロードを済ませ、新しい体で目覚めた望と縁は旧交を温める。当初はアップロードしなかったと思われていた新だが、実は二年早くアップロードして、精神を加速する新しい量子プロセス設計に取り組んでいた。50 年を経て加速に成功した後、新は望たちと合流した。三人は「サークル活動」を再開し、VLBI を増やしていく。こうして彗星上に作られた電波望遠鏡の一つに、三人は自分たちの名前を刻みこんだ。「望 新 縁」。

●遠過去（五）／一つの種族が〈籠居派〉と〈開拓派〉に分かれて争っていた。優勢なのは宇宙に乗り出すのは分別に欠ける行為だとする〈籠居派〉だった。〈開拓派〉は他の文明と接触して狩猟本能を発揮しようとしているという憶測すら流れていた。不可視となって探知を続ける〈飛行体〉は、やがて情熱を失い滅んでゆく惑星「希望」の、牙を持つ種族を悼む。

### 第四部

●遠未来（四）／「母子」は「大始祖」が初めて見つけた惑星に来ていた。しかし、「大始祖」について知っている生命体はなかなかいない。ようやく出会った原住種族の一人は「大始祖」を知っているどころか、かつて一緒に旅をしたことがあると伝え、「母子」を驚かせた。

●現在（時計を合わせる）／太陽系内の VLBI は百基に達し、ついに異星からの信号をとらえた。ケンタウルス座の方角、七十光年離れた惑星は C-1 と名付けられ、新が用意していた恒星間宇宙船〈ディヴィンヌ〉は四十七名の乗員を



乗せて旅立った。C-1 改め**ブラン**には、鳥に似た生命体（ブランアン）が存在した。この惑星では自転軸がほとんど横になっているため、夜が半年続く。昼を求めて南北に移動を続ける〈正弦族〉として彼らは進化した。一カ所に定住する〈水平族〉、さらには逆方向に移動する〈逆相族〉に変身することも可能だった。彼らと生活を共にしながら、望は自分たちの来訪が彼らに混乱や対立をもたらしたことを知り、これは一種の侵略ではないかと悩む。しかし、新の見解は違っていた。

●遠過去（六）／八本の腕を持つ種族の間では、自分の名が表すものを見ることは死を招くと信じられていた。しかし今では、名象は救済の象徴だと考える者が優勢となった。ある日、混合燃焼の実験中に大事故が発生した。〈地上の火〉という名前を持つ実験の統率者が名象により即死したことを受けて、古い考えを信奉する一派が台頭し、科学技術の発展には大きなブレーキがかかることになった。閉じこもってゆく惑星「**英知**」を見守りながら〈飛行体〉は潜伏を続けた。

## 第五部

●遠未来（五）／「母子」は「大始祖」が二番目に見つけた熱と乾燥の惑星を訪れた。ここで「大始祖」は原住種族を「死にゆく運命から救った」とされている。

●現在（梯子を接ぐ）／C-2 改め**グッドアース**では八本の脚と複眼、二対の翅を持つ生物（グッドアースー）が、広大な砂漠の中で暮らしていた。〈ディヴィンヌ〉と、ブランアンが乗る姉妹船〈トスカ〉がこの惑星を訪れ、彼らとの接触が始まった。グッドアースーは基本的に保守的で進歩を好まない「孤独相」として生活しているが、不可逆的な相変異によって、知的才能に特化した無道徳主義者であり、建造物の破壊にも及ぶ「群生相」へと変化する。再び自分たちの来訪が引き起こした混乱を感じながら、この真逆な相の調停を望みたちは引き受けた。仲裁の最中、「群生相」は望を人質にとり、無理な要求をつきつけるが、「群生相」の遺伝子的な問題点の解決を提案して仲裁は成功を収めた。

●遠過去（七）／その種族は女王を中心として、侍従、斥候、星読、伝達、彫刻など、それぞれの役割を持つカーストによって構成されていた。ある日突然、天球の一点に今まで存在したことの無い光が現れたかと思うと七夜後に消え、彼らは混乱する。しかし、二晩も過ぎるとその情報も消えていき、彼らは常態に戻った。惑星「**栄光**」で〈飛行体〉はその事実を暗い感情とともに認識した。

## 第六部

●遠未来（六）／伝説によると「大始祖」は旅の途中で「死者とも交流した」という。「亡霊を追いかけた」「死者を蘇らせた」という言説もあり、実際のところはわからない。同じことの繰り返しに飽き始めていた「子」は、偶然出会った始祖種族から「大始祖」は時間的にも「梯子を接いだ」のだと教えられる。

●現在（一億年の望遠鏡）／〈ディヴィンヌ〉〈トスカ〉、さらにグッドアースーを乗せた〈レジェンド〉の三隻はC-3に向けて航行中だったが、途中で星からの信号が途絶えた。たどり着いてみると、原住種族の文明は既に滅んでいた。その後も旅を続けていくと、滅んだ文明と出会う確率はかなり高い。生きることによって飽きてしまうのか。一億年前に惑星「**希望**」に住んでいた狼に似た生物の文明も滅び、今では遺跡と膨大な天体観測データだけが残っている。その解析結果から一億年前に二つの恒星系が突然見えなくなったことがわかった。望みたちは消えた「亡霊星」の場所へと向かったが、既にそこには何もなくて、ある時点で軌道を変えたと思われた。しかし「亡霊星」の足跡は他の滅びた星のデータにも残っていた。惑星「**英知**」の蛸型生物が残したデータには存在しない星の光。惑星「**栄光**」のオオスズメバチ型生物が残したデータにはその光が七日間だけ観測されていた。この現象は光の指向性を示しており、「亡霊星」は光を放出した反作用で軌道を変えているのだった。必要なデータがそろえば今の「亡霊星」の場所がわかる。こうして一億年を探る時間的な望遠鏡の確認作業が始まった。なぜ探すのか？ 「まだ見たことのないものを見たい」からだ。

●遠過去（二）／自分の精神を拡張し、惑星全体を包括するネットワークによって知性を高めた結果、彼は自らの限界を自覚して、「**滅亡の欲求**」を持つようになってしまった。さらに、自らの存在した証を残したいという欲求も生まれていた。もちろん彼が改造した暗黒天体を使えば、第二の欲求は実現可能だ。そんなある日、その暗黒天体から突然一つの意識が現れる。その意識は「滅亡の欲求」から彼を救うため、この星系を動かす方法を伝えに来たのだという。

## 第七部

●遠未来（七）／「母子」は「大始祖」の旅の終着点にやって来た。その惑星に長く住む「**門番**」のような存在によると、「大始祖」はここで滅びそうな種族を救って、互いに引き合わせたのだという。

●現在（導きの星）／ようやく判明した「亡霊星」の現在地は、望みたちの故郷から九百光年離れていた。最後に放射された光は地球からもよく見えたはずだ。その年代は推定によると紀元前4年。そう、「亡霊星」はあの「**ベツレヘムの星**」だったのだ。その実体は直径七億キロに及ぶ暗黒の〈霞〉だった。大量の薄い箔構造の物質がすべての電磁波を吸収していた。内部には二百以上の岩石惑星がひしめいている。二つの恒星を融合して作られたブラックホールに質量を投入し、必

要なエネルギーを取り出しているようだ。「歓迎する」という地球言語のメッセージに導かれ、二百人を超える望たち一行は一つの岩石惑星に降り立った。**ステラエンジニア**（恒星工学者）と名付けられた存在は、洞窟の壁面を覆う「粘菌」として巨大なネットワークを形成していた。この星系には他に三百を超える種族、十兆を超える住人が共存しているという。C-3 人、蛸族など住人のほとんどは既に滅びたと思われていた星の出身だ。なぜこれほど多くの文明を救うのかという望の問いに、自分も**滅亡に瀕した**ことがあり、自分から滅亡を遠ざけるためにこうしているのだとステラエンジニアは語る。続いてエンジニアはこの系に一億年前から存在する「**客人**」を望に紹介した。「客人」は望に対して挑発するような言葉を投げかける。

●遠過去（一）／暗黒天体の表面から光子流が放射され、量子意識が目覚めた。意識はこの系の支配者が自分を見つけに来るのを待つ。

## 第八部

●遠未来（八）／「母子」は「大始祖」が飛び込んだというブラックホールを眺めていた。旅を始める前の「子」に話しかけてきた人は「次はきみの未来で会おう」と言っていた。「子」はブラックホールの中がどうなっているのか、気になり始めていた。

●現在（地平の彼方へ）／特異点の先に何があるかはわからないが、物質や生命や文明が存在する可能性はゼロではない。今までと同じようにその可能性を試すため、望はブラックホールに飛び込むことを決めた。出発の直前、「客人」から届いたメッセージにはこの星系の成り立ちや軌道帆のハードウェアなど、**技術的な詳細**が含まれていた。役に立つだろうと思って望は旅立った。

## 第九部

●現在（環が閉じる）／出発を知り、「客人」は望の今後を思う。ブラックホールのあちら側で見る特異点は円筒状だ。過去方向に一億年、未来方向には無限に続く時空連続体。こちら側の「時間」はあちら側では自由に移動できる空間の次元だった。未来をのぞいて「子」と会った望は、最終的に過去へ向かい、もう一度特異点チューブに飛び込むことになる。こうして一億年前のこちら側に戻った望は「客人」となり、滅亡寸前の文明を救いながら、長い年月を過ごしてきた。「**門番**」としてこの星系に留まるというステラエンジニアにこれからどうするのか問われて「**客人**」＝望は答えた。「どこか遠くを見に行く」と。

## 春暮康一著作リスト（◎…短篇集、●…長篇）

◎『オーラリメイカー』（2019）早川書房（第7回ハヤカワSFコンテスト優秀賞受賞作「オーラリメイカー」と「虹色の蛇」を収録）→『オーラリメイカー〔完全版〕』（2023）ハヤカワ文庫JA

◎『法治の獣』（2022）ハヤカワ文庫JA（「主観者」「法治の獣」「方舟は荒野をわたる」を収録）

●『一億年の望遠鏡』（2024）早川書房

### 名前の由来

- ・宇宙船の名前「ディヴィンヌ」「トスカ」「レジェンド」はいずれもクラリネットの機種の名前（フランスの最高級ブランド「ビュッフェ・クランボン」の商品名）から。
- ・惑星C-1は「ブラン＝祝福されたプラン」と名づけられているが、これはアイルランド神話の巨人の名である。恒星ベナルダンも神話関係だと思われるが詳細不明。どなたかご教示ください。
- ・惑星C-2は「大地（グッドアース）」と名づけられているが、これは中国を舞台としたパール・バックの『大地』から。恒星の名がパールであることから明らかだろう。
- ・彗星には発見者の名がつけられる。本書108頁に登場する北条・アヴェリン彗星（2037年発見）の発見者の一人は、望が所属していた高校天文部の北条先輩ではないかと想像してみるのも楽しい。
- ・惑星〈英知（ウィズダム）〉の蛸族は、名前を表すものを見ると死ぬと信じているため、まず見られるはずのないものの名をつける。この習慣は、遠くを見る＝望という名を与えられて、その名のとおりに生きた主人公（縁、新も同様）と真逆の方向を示している。どちらにせよ、名の持つ意味が大きく捉えられているという点に、本書の特色の一つがあるようだ。（W）



# MEMO

## 名古屋 SF 読書会

初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。

<https://sciencefiction.ddns.net/sf2/>

【今までの課題本】

- 1 2014・11・22／ル・グイン『闇の左手』
- 2 2015・2・15／ベスター『虎よ、虎よ！』
- 3 2015・7・26／ブラッドベリ『華氏451度』
- 4 2016・1・23／イーガン『ゼンデギ』
- 5 2016・4・29／ハインライン『宇宙の戦士』
- 6 2016・7・30／ベイリー『カエアン』の聖衣』
- 7 2016・11・23／レム『ソラリス』
- 8 2017・4・30／ノース『ハリー・オーガスト、15回目の人生』
- 9 2017・8・5／ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』
- 10 2017・12・2／伊藤計劃『ハーモニー』
- 11 2018・4・29／オールディス『地球の長い午後』
- 12 2018・7・21／小松左京『日本沈没』
- 13 2018・12・22／ウィングダム『トリフィド時代』
- 14 2019・4・27／山田正紀『宝石泥棒』
- 15 2019・8・3／クラーク『2001年宇宙の旅』
- 16 2019・12・22／劉慈欣『三体』
- 17 2021・10・3／劉慈欣『三体Ⅲ』（オンライン）
- 18 2024・6・30／飛浩隆『グラン・ヴァカンス』
- 19 2024・10・6／ウィアー『プロジェクト・ヘイル・メアリー』
- 20 2025・3・8／アシモフ『鋼鉄都市』
- 21 2025・6・21／ギブスン『ニューロマンサー』
- 22 2025・9・27／春暮康一『一億年のテレスコープ』
- 23 2025・12・27／未定

## スタッフ&ゲスト紹介

名古屋SF読書会は初心者からマニアまでをモットーにやさしく丁寧、かつ面白い読書会を目指しています。今後もよろしくお願いいたします。（文責・渡辺英）

長澤唯史 @Sonopapa

椋山女学園大学教授。著作に『70年代ロックとアメリカの風景』（小鳥遊書房／2021年）。

渡辺英樹 @gonza63

SF大会に参加してきました。懐かしい方に会えたり、企画に参加したり、楽しく過ごせました。SF資料館設立準備中。

中村融／なかむらとおる（翻訳家）

中央大学在学中より海外SFの研究、評論、翻訳など幅広い活動を行う。1987年にジャック・ヴァンスの「五つの月が昇るとき」で翻訳家としてプロデビュー。以降、新作の翻訳紹介、古典の新訳、SF／ファンタジーのアンソロジー編集など、多方面で活躍中。

舞狂小鬼（洞谷）

SF、幻想小説、海外文学など何でも読みこなす読書家。作家ではレムとストルガツキー兄弟とバラードと泉鏡花が好き。ブログ「お気らく活字生活」継続中。

渡辺睦夫

海外SFファン。好きな作家はC・スミス、J・ティプトリー・Jr.、B・ベイリー、M・コーニイなど。洋楽ファン。好きなジャンルはパワー・ポップ、オルタナ・カントリーなど。

渡辺啓一 @eleking

大学時代にSF研に在籍して基本を学び、あとはのんびりSFと付き合っています。